

## バスケットボールプレー中に生じた 膝蓋骨内側 sleeve 骨折の 1 例

○都井 政和<sup>(MD)</sup> (といまさかず), 神頭 諒<sup>(MD)</sup>, 中山 寛<sup>(MD)</sup>, 吉矢 晋一<sup>(MD)</sup>

兵庫医科大学 整形外科

小児における膝蓋骨骨折は1%程度で、その内の約半数は裂離骨折 (sleeve 骨折) とされる。sleeve 骨折は膝蓋骨上下極に多く、内側に生じることは稀である。今回、スポーツ活動中に生じた膝蓋骨内側 sleeve 骨折に対して手術を行い、スポーツ復帰した1例を経験したので報告する。症例は11歳、女児で、バスケットボール中に右足を前に出し踏ん張った際に受傷した。右膝痛を主訴に同日他医救急外来を受診し、単純X線像で明らかな骨折を指摘されず膝伸展位固定で経過観察となったが、翌日他院整形外科を受診し右膝蓋骨骨折と診断、当科紹介受診となった。受診時、右膝関節は疼痛のため自動他動運動困難であり、関節水腫を認め、膝蓋骨内側から大腿骨内側顆に圧痛を認めた。単純X線・CT像にて、5mm以上の転位を伴う右膝蓋骨内側 sleeve 骨折を認め膝蓋骨はやや外側に偏位し、大腿骨滑車の低形成を認めた。Suture anchor法を用いて観血的に整復固定し、術後はニーブレスで膝伸展位固定、患肢免荷とし、術後4週目よりニーブレス除去し膝蓋骨装具装着の上で部分荷重を許可し、可動域訓練を開始した。術後2ヶ月で骨癒合を確認。術後4ヶ月で可動域、筋力は健側とほぼ同等となり、スポーツ復帰を許可した。現在術後11ヶ月で、元のレベルでスポーツを継続している。

非常に稀ではあるが、スポーツ活動中に生じた膝蓋骨内側 sleeve 骨折を経験した。成長期における膝スポーツ傷害として、本症が発生し得る事も念頭に置く必要がある。